

学習支援教室NPOへの少年水産教室

水産海洋技術センター 紫波俊介、米丸浩平、久保弘文

※福田千絵

1. 目的

生活保護受給世帯への学習支援教室と連携し、同生徒に対し、少年水産教室を実施することで、地域の社会人や産業・食物に直接ふれあい、地域との繋がりを感じて、自分らしい生き方実現への機会の一つとすること、また糸満水産業への担い手作りを目的とする。

昨年度学習支援NPO（生活保護受給世帯児童学習支援教室）、糸満漁協、仲買人、県が連携し、水産教室（座学・乗船・調理実習・テスト）を実施し、水産高校への進学者1名という結果を残した。

今年度は沖縄水産高校生徒も講師として参加して頂き、子供達により近い未来を感じてもらうことも視野に入れ、開催した。

また今年度より糸満漁協が主催し、未来のマリンパワー確保・育成一貫支援事業を用いて実施した。

2. 方法と結果

2日間実施し、漁船漁業体験と座学、調理実習、ストラップ作りを行った。

（1）漁船漁業体験

小中学生13名に対し実施した。パヤオ体験予定だったが、荒天のため喜屋武沖での沿岸魚類を対象とした一本釣りに切り替えた。

うねりに対して島影ではあるものの、時化には変わらず、当方が乗船した船には5名の中学生が乗船したが、4名が船酔いしてしまった。しかしながら酔った者も、休んでは釣り、吐いては釣りと、積極的に糸を垂らしていた。



（2）座学、調理実習、ストラップ作り

糸満漁協にて、那覇市沿岸漁協所属与那嶺克也氏から沖縄の水産業と自身の経験について、沖縄水産高校から学校紹介の講義があった後、漁協組合員・職員によるマグロ・ソデイカ解体ショーが披露された。その後、実習として漁協女性部や職員が魚の捌き方、沖縄水産高校生がくみひもストラップ作りを指導した。お昼は自分たちで切った刺身も食べつつ、交流を深めた。

※(財)沖縄県環境科学センター職員



3. 考察

前年度中心的に動いて頂いた那覇市沿岸漁協所属、与那嶺克也氏には、実施までの関係機関との調整にも積極的に参加して頂いた。また、地域に根ざすことを考慮し、ご自身は当日身を引かれるなど、漁業士にふさわしい活動をして頂いた。今年度より県補助事業を用いているため、補助金が終了した後も持続出来る様にもってほしい。

今回、受講生と年の近い水産高校生が参加したことで終始楽しい教室となり、また海人になるまでの具体的な道筋をひとつ示すことも出来たのではないだろうか。

もう一つ、国の学習支援教室に対する補助制度の変更（複数年度から単年度更新に変更）により、NPO法人が年度当初から児童を預かることが出来ず、また、NPO法人も昨年度と異なったため、児童との信頼関係構築に時間を要する様になったこと、それに伴い事業実施時期も遅くなったことは残念である。

